

博士課程教育リーディングプログラム 平成27年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成24年度		
申請大学名	同志社大学	申請大学長名	村田 晃嗣
申請類型	複合領域型（多文化共生社会）	プログラム責任者名	和田 元
整理番号	L03	プログラムコーディネーター名	内藤 正典
プログラム名	グローバル・リソース・マネジメント		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

人間生存の基盤たる「資源・エネルギー工学、インフラ科学」と「地球規模の課題群に関わる人文・社会科学」を融合した新たな学際領域「グローバル・リソース・マネジメント」を設定し、現在の困難を解決し、将来に生じうる隘路を事前に察知して対策を講じうる能力を有する、新興国、及び最困難国で活躍するグローバル・リーダーの養成を目指す。同志社大学は、博士課程教育リーディングプログラムを推進することで、現在、世界が直面する多様な課題に対して、知識偏重的な学習・研究から脱したうえで、広い視野から主体的に問題を発見し、その解決に向けて創造的な思考をもって行動できる高度専門職業人材の養成を図る。そのため、既存研究科の主流となっている学問系統別の教育研究方法ではなく、issue-focused（課題追究型）かつsolution-oriented（解決志向型）な教育研究方法を大胆に取り入れる。本プログラムは、その先駆として位置づけられるものであり、複数の研究科の協力・連携による領域横断的・応用的教育プログラムを設置し、知のイノベーションによって大学院修了者のキャリアパスの拡大を図る。

2. プログラムの進捗状況

本学大学院の博士課程教育リーディングプログラム「グローバル・リソース・マネジメント」（以下、「GRM」）は、Preliminary Examination（以下「PE」）合格者8名、Qualifying Examination（以下「QE」）合格者5名（内、継続履修3名）、合計35名のプログラム履修生に加え、9名の履修候補生で平成27年度を迎えた。GRMの教育課程のコアを成すGRM共通科目（国際会議の組織と実践、オンサイト実習、フィールドワーク、インターンシップ、コモン演習）については、事前のフィージビリティ調査をふまえて各地域、機関へ順次学生を送り出した。平成27年度は、関連事業を（1）学修環境の整備、（2）コースワーク運営・支援体制の確立、（3）コースワークの実施と機能強化、（4）プログラムの評価、（5）キャリア形成支援、（6）優秀な学生の確保と説明責任（成果の公表と情報公開）、（7）経済的支援の7項目に大別し、プログラムの着実な実施と充

実化を図った。これらの活動により、平成27年度末に実施したPEでは3名、QEでは6名（内、継続履修5名）を選抜し、GRMは合計38名（内、4年次以上の再修生4名）のプログラム履修生で平成28年度を迎えることになる。

(1) 学修環境の整備

「GRMコモン・ルーム」は、理工学系学生のTAが人文・社会科学系の学生の実験を支援する基礎工学実験科目「GRMインフラストラクチャー基礎実験」、文理の学生が共修する「GRMコモン演習」、「GRMオンサイト実習」等の事前・事後指導、さらには「GRM Lecture Series」、「GRMキャリア形成支援セミナー」等の正課外の特別講義の教室として幅広く使用し、文理の学生が互いに切磋琢磨する融合空間として機能している。平成27年度は、当ルームに配備するテレビ会議システムを利用し、本学及び慶應義塾大学、UNESCOエチオピア事務所との3地点での合同演習を実現した。GRMの日常教育の場を他大学に開放する試みは、プログラム履修生にリーダーとしての自覚と素養を身に付けさせる目的において、今後ますます重要な事業となる。また3月には、全国リーディング女子合宿の事前学習として、文理双方のプログラム履修生が、国立大学に専任教員として赴任した前GRMプログラム担当教員による指導を遠隔で受けるなど、教員の流動性と教育の継続性の両立にも寄与した。

(2) コースワーク運営・支援体制の確立

GRMの学位プログラムは、学知の修得と現場での実践の絶えざる連環によって構成される点に特色を有することから、学位プログラムの実施過程において、産官学民の連携によるPBL型の教育手法を積極的に取り入れている。平成27年度は、延べ74人の企業、政府機関、国際機関、研究機関の職員等が本プログラムの実施に協力、参画した実績からも、当初計画で目指したissue-focused（課題追求型）かつsolution-oriented（解決志向型）の教育システムは、産官学民連携により確立、定着しつつあると言える。この教育システムを維持・発展させるためには、国庫補助や大学の支援を待つだけでは不十分であり、本プログラムの趣旨を共有する団体・企業などとの連携によるファンド・レイジングが急務である。平成27年度には、この課題に対応するスタッフ1名を大学予算で雇用し、プログラムコーディネーターの指揮下、カタール財団との間でファンド・レイジングのために活動を開始した。

(3) コースワークの実施と機能強化

GRMにおける分野横断型の活動や授業では、プログラム履修生に相当量の負担を課すことになる。このことから、平成27年度は各事業（授業）間でのテーマの共有と連携を図った。例えば「GRMオンサイト実習」では、宮古島市で実証試験中のエネルギー科学技術をビジネス化するというテーマを掲げたことから、「GRMコモン演習」ではその前段として科学技術を取りまく日本国内および海外での応用の動向を学習させる等、授業科目間に関連性を持たせた。

また平成27年度は、GRMのこの間の実績を踏まえ、プログラムの全学展開に向けて、産官学民の連携による「多文化共生」教育コンソーシアムを形成し、実践型文理融合教育を実施する方向性を全学で共有した。大学院学生に文理の融合知と実践知を身に付けさせることから、現行教育課程を継承する方向でプログラムの内容を精査し、講義科目についてはより効率的に知識が身に付く内容と方法を開発すること、また演習・実習科目については、統合化を図り、運営にかかる経費削減を目指し、さらに高度専門人材養成の目的からインターンシップを義務づける等の教育課程の再構築の検討を開始した。平成27年度は、連携研究科のプログラム担当教員が提供する科目の履修状況が低く、特定科目に偏る分析結果から、新たな基幹講義科目として「GRM共生論」と「GRM資源管理論」を開設するなど、サブ・メジャー科目の再編成を行った。同時にGRMが新たに開発した講義科目では、プログラムの全学展開に向けてオリジナル教材の開発にも着手し、平成27年度は「難民問題－パレスチナ・ガザ調査－」を発行した。さらに「国際会議の組織と実践」では、授業運営にかかるFDハンドブックを作成した。

(4) プログラムの評価

平成27年度は、自己点検・評価委員会を組織し、本委員会で設計した「自己点検・評価にかかる事業評価シート」を基にプログラムの達成度と運営状況を点検し、課題の整理と改善策を検討した。この自己点検・評価では、外部評価委員会を組織し、外部の専門家による達成度及び運営の

評価を受けた。なお自己点検・評価では、外部機関からの参画者を対象とするフィードバックアンケートを実施し、プログラムの定性的な評価を数値で示すことにより、プログラムの実態を客観視することに努めている。

(5) キャリア形成支援

平成27年度は、プログラム第1期生（ただし、編入生（後期課程1年次からの履修））の一部が、博士後期課程の修了を迎えることから、この間のキャリア形成支援の成果が問われる年度となった。GRMによる学生のキャリアパス形成支援は、キャリアコーディネーター（専任教員職）を置くところに特徴を有することから、平成27年度はこの専門職の機能と役割を検証する年度でもある。結果、文系のプログラム履修生が実力で大手総合電機メーカーの内定を得たことから、博士課程の学生のキャリア形成を支援する上で核となる事業を次の3点に定め、GRMは今後の3年間でキャリアコーディネート業務の全学的な定着を図ることになる。

① 研究指導教員以外による学生との個人面談

学生の希望進路の把握を主たる目的とし、少なくとも半期毎に実施

② キャリア形成に係る正課授業、正課外事業の実施

自己理解や実務における論理を知る機会の提供（PROGテスト、社会人基礎力養成キャンプ、GRM TED TALK）

③ 企業・国際機関の人事担当者への訪問・データ共有

博士学生の採用状況の確認やプログラム履修生の採用の働きかけを一義的な目的とするが、GRMの教育内容と訪問先機関のニーズの親和性を認識することにより、①の面談及び②のキャリア形成支援事業にフィードバックすることも目的とする。企業訪問と学生面談を繰り返すことにより、アカデミア以外の実務者と学生の交わりの機会を設け、アカデミア志望の学生にもノンアカデミアへの進路を意識させる。

(6) 優秀な学生の確保と説明責任（成果の公表と情報公開）

平成27年度に実施したPEとQEの結果、平成28年度から新たにGRMに加わる学生は、博士前期課程で3名、後期課程で1名、またQEを経て博士前期課程からの継続で履修する学生は5名である。GRMは博士前期課程の2年次から正式に履修を開始するプログラムとして、平成28年度に完成年度を迎えることになる。その平成28年5月1日現在の学生の構成は次の通りであり、プログラム収容定員充足率は57%、1学年あたりは87%～27%となっている。

- ・留学生：55.3%
- ・自大学出身者：26.3%
- ・他大学出身者：73.7%
- ・社会人学生：5.3%
- ・女性：44.7%
- ・基幹（理工学研究科、グローバル・スタディーズ研究科）以外：18.4%

また平成27年度は、英文学術雑誌「GRM Journal vol. 2」を刊行し、履修生が身につけた専門性を社会に向け発信した。キャリアコーディネーター等による博士人材採用に意欲的な企業や国際機関等への訪問は4年目を迎え、延べ100機関を超えた。訪問先からは、GRMとプログラム履修生に関心が示され、新たな共同プログラムの開発や出口開拓につながるなど、対話型の成果報告と情報公開が機能しつつあると言える。

(7) 経済的支援

GRM特別奨励金制度により、給付条件となるPE合格者より8名、QE合格者より22名の受給申請があり、PE合格者には月額15万円、QE合格者には月額20万円の奨励金を給付する経済的支援を行った。また、フィールドワークやインターンシップを実施した20名（個人派遣型11名、団体派遣型9名）の学生に対して、渡航費、宿泊費を支援した。